○茶の始は明惠上人に非す

妙惠上人歸朝の日茶種を將來して栂尾に植ゑ、後に又宇治へ頒ち栽ゑらる、是を本邦に茶を栽るの始といふは誤なり、はるか古へ傳敎大師異邦の種を將來して、江州坂本へ栽ゑたまひしこと、坂本日吉社の舊記に詳なり、季の御讀經の二日めに行茶とて茶をしくことあり、年中行事歌合の左註に詳なり、天平の比よりありし趣なり、公事根源にも見ゆ、伊勢の神庫の舊記にも行茶の事あるよしなり、大內裏の時は方一町の茶園を置かれしこと拾芥抄に見ゆ、延曆年中の事なり、建仁の開山千光國師の喫茶養生記といふ書もあり、かた〳〵以て茶を喫することは古き事なり（橘泰）

○小式部內侍の墓

丹波國部より但馬へ往く街道に、須知といふ所より十二三町過ぎて花岡山といふ名所あり、丘原なり、躑躅多くありて、丘上の平原を深志野といふ、西行上人

花をかや露深し野に來て見れば衣の袖もしほたれにけり

此所より廿四五町先に新田といふ所あり、清巖寺といふ一禪刹あり、松樹下に小式部の墳墓あり（同上）

○早起家と晏起家との爭

米國六代の大統領ジョン、クインシー、アダムスは著名なる早起家なり、其親友ケムブリッヂ大學敎授判事ストーリーは有名なる晏起家なり、二人動もすれば輙ち二者の利害を論じ互に其說を執て下らず、アダムス大統領辭職の後偶ま英國に遊びストーリーの案內にてケムブリッヂ大學に到り一場の演說を爲せしが、懇々學生の要務を說き特に早起の利を論ずると甚だ切なり、演說終るやストーリー乃ち講義を始めしが此日溫暖にして敎場大に熱せり、講義將に了らんとする頃諸士頻りに嘻笑す、ストーリー左右を顧みればアダムスの椅子に凭て睡り禿顱搖々上下するを見る、因て諸生に告げて曰く諸子請ふ之を事實に徵して早起の弊を知れと、衆哄笑す、アダムス乃ち覺め笑聲の起る所以を怪むで只だ茫然たりしとぞ

○北條氏政の辭世

盛者必衰は世の常とて關八州に武備を輝したる北條家も、氏政に至りて天正十八年七月十一日を以て切腹して世を去りしが、其時辭世の歌に曰く

吹きすさむ風な恨みそ花の春紅葉の殘る秋あらばこそ

○盗兒の風藻

岡山生れの藤田傳造と云へる京都奈良地方の大盗、天網遂に逃れず此程堀川警察署の手に捕はれ、逐一罪業白狀の後更に筆紙を請ひ求め、筆跡さら〳〵と賦して曰く

名譽難レ洗荷三積座一、遺憾心情向レ誰陳、可レ憐堀川監獄夢、他日青天白日身、

と、是れ警官の懇諭に積年の罪障悔悟の情一齊に湧出し來れるによるとぞ(二六新報)

○沼間守一田舍漢の無鐵砲に驚く

沼間守一曾て新橋より萬世橋迄、鐵道馬車に乘れる時、二人の田舍紳士らしき人、沼間の正面に腰打ち掛けて、頻りに法螺の吹き競べを爲し居りしが一人のいひけるやう。「僕は東京有名の人士に知己多し。福澤も知己なり、河野敏鎌も知るなり、沼間守一の如きは、別して親しく交はれり。今日も只今より同氏と某酒樓に會飲すべき約束せりなど、有名の士に知己の多きを誇るが如く、沼間の顏をジロ〳〵詠めながらに喋り立てけり。是れは沼間と知らずして斯く喋り立つるなり。左れば沼間は見ず知らずの人に頻りに己れの名を喋々せられ、可笑しさも可笑しく、その人の無法なるに喫驚したりき。(羽化生)

○筥セコの奇緣

下谷三輪町に藤田伊助と呼ふ雪踏直しあり、長男伊三郎は靴職にて淺草諏訪町の或る店に雇はれ、親子三人何不自由なく其日をおくる者なるが、此家に相應しからぬ最と古びたる筥セコを所持するを、差配人須藤爲次郎の妻いつか認めて、折もあらば由來を問はんと思ひ居けるに、此程先代の法會をいとなみければ、伊助を招きて晩食を振舞ひ、扨て筥セコの事を問へば、伊助は答えて、私は故よりの穢多にて、女房の親も同じ仲間なれば、中々御殿奉公抔せしものに非ず、彼の筥セコは郡上の青山樣の御家中にて、由緒ある御方の品なるが、身分が穢多なれば名乘り出でゝ御返し申すともならず、云はゝ預りものなり、今は昔文化二年の八月十九日、私の父親芳藏が深川八幡の祭禮を見物に出掛けし砌り、永代橋の傍に抵りしとき、橋の落ちたりと人涙打つてどよめき騷ぎ、押倒されて辛くも其場を避けて、一ッ橋樣の御屋敷の窓下に至りて太息を吐き居ける處へ、十一二歲の孃樣が供の衆に離れ、只うろ〳〵と泣くにも泣かれず、途方に呉れて彷徨ひ居たるを見認め、孰れの御方かは知らねども、橋の落ちたるとを親御の聞かれなば嘸驚き給はん、何は扨惡漢等に見認められなば如何なる災難に遭はんも測られず、不憫の御娘よと呼び止めて、御屋敷は孰れなるや御送申して進せんと尋ぬれば、水道橋外の青山なりといふ、依りて此方へ參られよと案内して、一ッ橋樣の御門前迄漸〳〵連れ參り、腰帶を取りて孃樣を確と脊負ひ尻引

からげ、火事場に均しき往來を恙なく水道橋迄駈け行きて、青山樣の御門前に抵り、早う御歸りあれよと御門の内に入れ申して、再び永代橋最寄に抵り橋の落ちたる樣子を窺ひ、漸く淺草山谷の我家に歸り、危き命を助かりしと、衣類を脱きて見れば腰に下げたる莨入は勿論財布は、何れにか落したれど、嬢樣を背負ひたるとき我手に受取り確と懐ろに收めし筥セコのみは殘り居たり、扨先樣にても何者の背負ひ來たりしかと定めて御尋なされしならんが、穢多の悲しさ預り申せし其品さへ、返し申さんとの叶はずして止みたるなりとの物語りに、須藤の夫婦打驚き、丹は同家中安藤内匠と申せし重役の嬢さんにて、昔話しの今尚耳に遺れり、其嬢さんは今こそ世になき人となりたれ、兎にも角にも郡上に住む安藤の許に紹介せんとて、早速爲次郎より委細を同家に云ひ贈りたりとぞ、是れも一種の奇遇といふべし（朝新野）

○兒島高德の墳墓

出雲國能儀郡清水山に、大同元年の建立に係る清水寺と云へる一刹あり、其麓に土人の口碑に正平塚と云傳ふる古びたる墓碑一基ありけるが、何人の碑にして又何人が建しものなるや絶て知るものなかりしかど、先年或好事家同地に至り、彼の碑を取調べたしと處の村長に乞ひて之か許を得、丹が四邊の荆棘を刈取り這のほりたる蔦蔓なんどをとり拂ひ苔とりはぎて水もて洗ひたるに、左の圖の如く文字の顯れたれば之を見ていよ〳〵驚ろき懼れたりと、文字の部分既に缺けて跡さへ見えずなり居たる處あり、又兒の字高の字も半は缺け損じ居たれど、年號も正平とあれば公の墓碑なることと疑ひなきや明なり、公は晩年に僧となり名を志純と改め、跡を晦まして諸國を巡回し、陰に南朝の再興を謀り居たるとのことにて、其清水山の山背に在る清井村の雲樹寺と云へるは、公が遊歴せし寺なりと云へば、其邊にて逝去せられしものならん、又碑の高は五尺有餘にして三重なれど、其昔しは尚ほ此の上に幾個かの石を積み重しものと思はるゝなりと、先年知友より來翰の端に書越せしを手扣に記しありたれば史家の參考にもと其まゝを爰に記るしぬ

（河村直民）

○存義紀文の故居を購ふ

平澤常富云、我十二三四五の比なるべし、存義小網町より深川一の鳥居の北側越えて住す、父と共に行きし事あり、又點取の懐紙の即點のために我ばかりゆきたる事もあり、此花は紀文が衰へてのち住みける所なりと聞きて、少年の時ながらすこし心をつけて見たるに、かばりたる事もなかりし、天井は一枚

紙をたゞやたらに亂りにかさねて張りたるやうに覺えし、其後三十年計り後に、存義がはなしゝとて晩得が物がたりけるは、かの一の鳥居の住宅の、やぶれそこねて見にくければ、いかやうにも繕ひてよと、門人の中に經師のありければ頼みけるに、かの經師損じたる所を委しく見て、横手をうちて感じていひけるは、此天井もとのごとく繕はんは甚難義なり、紙の色いろ〳〵に少しづゝかはりてみゆれど、皆同じ白紙にて、糊は色々の糊にて張りたるなり、百年に及ぶ糊あり、五十年二十年或は十年經たるも有るべし、今かく百年を經る糊もちたるものなし、奇なり〳〵とて感じたりとなん、世にはさま〳〵かゝる話も有ることながら信じがたき事歟、紀文にはわきておもしろき咄も聞き侍りき（假名世說）

○ありがた坊

寶暦の末淺草寺のほとりに、ありがた坊と異名をとりし僧有りけり、本名は樂心といへり、この僧もとより聾にして啞なりければ、自性院といへる地藏堂の常念佛の役に抱へられけり、結衆仲間にても、件のかたはを侮り夜の勤番にのみあてけり、樂心は苦にも思はず、元よりものいふ事もならねば終夜鐘をならしてあゝあゝとのみいひて勤めけり、ある夜丑の刻ともおぼしき比、地藏尊御聲高く樂心々々と呼び給ふ、樂心はじめて耳に入り、あいと答へ、又舌もまはれば有りがたうござりますといふ、これより物もいはれ耳もきこえて、今はよのつねの人に異ならず、唯言葉のあとさきに有りがたうござりますといふを口くせにいへば、有りがた坊と異名せり（同上）

○三日食牛の氣あり

オリヴァー、クロムウエル五歳の時、其の叔父ヘンリー、クロムウエルの第へ、英王ヂエームス一世の行幸あり、幼なき皇太子チヤールス殿下（後に英王チヤールス一世）も父王に伴ひ給へり。ヘンリー、クロムウエルは此上なき冥加の事に思ひて饗應し奉り、皇太子殿下の御伽の爲めに姪のオリヴァー、クロムウエルを招きしが、（皇太子は此の時四歳、オリヴァーは五歳なり）オリヴァーは殿下の御伽をなして戯れ遊び居りける中、不圖兩人の間に爭ひを生じ、年長なるオリヴァーは殿下を捕へて散々に打擲したりとぞ。左れど頑是なき子供の事ゆゑ、別に罪を裝むらずして事濟みしが、同國の史家は、これぞ後年クロムウエルが民黨の領袖としてチヤールス一世王を廢し、皇統連綿たる英國を一時共和國に改めたる前表なりしならんといへり。（羽化生）

○歷山大王、女人國王に面會す

馬基頓（マセドニア）の歷山大王（アレキサンダー）が女護島（にようごのしま）の王に面會せられたりといふことは、西洋にても逸話中の逸話とする所にて、眞僞は固より保證し難けれど、左に聊か女護島の成立を記し、其の女王と歷山大王と面會したることを

述べん。

女護島は、往昔カパドシア國（小亞細亞の一國なり）のセルモドン河邊に在りしと言ひ傳ふ。國中、一人の男子なく、國民は悉く女子より成れども、其性雄々しくして常に戰を好み、男子の爲すべき業を執れり。平素は一切男子と交通を爲さゞれども、子孫繼續の爲めに時々近國を訪ひて數日の間男子と交り、さて國に歸りて後、產む所の子若し女子なれば、手許に養育して家を繼がしめ、男子なれば、父の許へ送りたりと。（羅馬の史家ヲヤスチノの說に據れば、男子なれば生るゝや否や縊り殺したりといひ、又同きダイオドラスの說に據れば、手足を扭ぢ歪めりといふ。何れか眞なるを知らず。）又女子なれば母に就て戶外の業を習はしめ、且つ投槍を投げ、矢を放つに便ならしめんが爲めに、右方の乳房を燒き切るの慣習なりき。歷山大王が希臘の大軍を引率し、破竹の勢を以て波斯印度等を征服するに當りて、女護國王ペンセシレアは、遙かに大王の英名を聞きて戀慕の情に堪えず。一には其の風采を目擊せんと欲し、又一には女丈夫を產みて富强の度を加へんと望み、千里を遠しとせずして、行きて大王に謁せり。大王も亦其の懇情を喜びて之を歡迎し、頗る優待せられたりといへり。但し其後の事は誰れも知る人なし。（羽化生）

○福羽美靜新聞紙の諧謔を笑ふ

子爵福羽美靜、一日車を馳せて九段坂を登る、車夫誤ちて車を覆へす、美靜落下て地にあり、翌日某新聞之を傳へて曰く、某子爵、昨日車より落さる、微壁を以て車夫の失錯を罵れりと、美靜之を讀んで笑つて曰く、新聞記者の惡口、遂に此處に至れりと（青々園）

○古河默阿彌の絕筆

古河默阿彌死するに先だつこと十日、蓐中にあつて俗謠をつくる

日を重ね訪來る人もあふみぢや、逢ふ事ならぬ床の山、今は片身もきかざれば、寐返りさへも奈良坂や、見手柏の二た面、こゞの暮より病まぬ前は、都の花を見ん物と、思ひし念も月夕瀨の、梅さへ今は後れたり、及ばぬ事を思ひ寐に、葡萄酒の醉めぐり來て、うつら〳〵と心よく、波に漂ふ鷗の如く、何時か眠りに筑波山、このもかのもの床ずれを、厭ふ蒲團の紫や、霞たなびくしのゝめを、待つに嬉しき明け烏、朝日の影を見るにつけ、又今日の日を如何にせん、苦勞のたえぬ事なりし

蓋し病中の實況にして、これ默阿彌が絕筆なりき（同上）

○坂東是好數字の歌

四代目坂東三津五郎俳名を是好といへり、至て風流を好み、自作の歌に霜夜といふ題にて

八萬三千八　三六四　三三四九

一八二　四五十二　四六　百四億四萬

五二七九　二八二　三九百　七九三三四

九六三四八　八七十　三千四萬

或人この歌の讀みやうを問ふ、是好筆をとりて

やまみちは、さむし、さみしく

一つやに、よごとに、しろく、もゝよおくしも

いつになく、にわに、さくもゝ、なぐさみし

こゝろくみしや、はなぞ、みちしも　（同上）

内外古今逸話文庫第拾編終

73
7

003996-002-6

73-7

内外古今逸話文庫
（自第一編至第五編）
岸上　操／編

M26, 27

ACE-0288